

ナレーションを活用した言語教育の音声教材 —ランゲージアーツに着目して—

王 伸 子

1. はじめに

言語教育における研究は、さまざまな側面からおこなわれており、言語の四技能の各側面を伸ばすさまざまな試みがおこなわれている。筆者は、日本語教育における音声指導という領域で、学習者への指導と共に、習得の研究も続けている。2016年からは、ナレーションを学習の素材として活用することとともに、ナレーターの実践方法が、言語教育に活用できるということを検証している。また、本研究では、ランゲージアーツという側面を研究のフレームワークとして位置付ける研究と、それに基づく教材作成にも着目した。本稿では、これまで続けてきた、ナレーションを言語学習に活用するという教材を、ランゲージアーツの側面から組み立てることを試みる。とくに、ランゲージアーツの先行研究等を見ると、言語学習の中でも、声を出して言語を発信するという側面に力を入れていることがわかる。COVID-19の影響で、声を出すということを控えようとする現状であるが、逆に、これまでになく、「声」が注目されるようになったのも、近年の特徴ではないかと思われる。

しかし、本研究課題は、一貫してそうであるのだが、発音が上達するための音声指導ではない。声を出すアクティビティによって、四技能をバランスよく伸ばすと同時に、学習者それぞれの学習背景にもよるが、声を出して繰り返すという運動学習によって、学習言語の定着に作用する聴覚フィードバックを促進することを目的とするが、その途中に動機づけが上がるという効果を重視するアプローチにも着目する。さらに、本稿では、音声指導の

基本となる声に焦点を当て、その価値をあらためて記述し、さらにランゲージアーツという枠組みについて述べ、それらを総合して、新しい言語学習に貢献できると思われる指導法へのアプローチを提唱することを試みる。

キーワード：ナレーション、ボイスサンプル、ランゲージアーツ、四技能

2. これまでの研究について

2.1 研究の概要

これまで、日本語教育における音声発話の練習教材の開発を目的とした基礎研究をおこない、並行して、ナレーションを主体とした「ボイスサンプル」と呼ばれている録音素材（ボイスデモ）の活用を試みてきた。具体的には、ナレーター、アナウンサー、声優の音声を録音し、音響的に分析することと、実際にナレーション等のボイスサンプルを作成するという日本語学科の専門科目の授業（「日本語表現論1」）をおこない、その過程の観察と学生による録音の評価をおこなってきた。これについては、以下の科研費を獲得し、研究をおこなっている。

基盤研究 C（2017～2019）課題番号 17K02866

「ボイスサンプル」を応用した日本語音声指導の研究と開発

基盤研究 C（2020～2023）課題番号 20K00733

ナレーション音声による日本語教材の開発

－効果の実証的研究と教材開発－

これらの研究の到達目標は、新しい教材の開発である。ナレーション音声を利用した、発話や聴取を支援する音声教材を作成することであり、副教材的に、どのレベルでも使用できるものを目指している。この教材を実際の日本語教育現場で使ってもらうため、2017年から国内外で日本語教師を対象としたワークショップを実施してきた。2020年からも予定していたが、COVID-19のため、対面でのワークショップが実施できない状態なので、オンラインでこれを普及することができるよう、最初の科研費で作成したウェブサイトを、現在、改修中である。

次に、この研究をどのような理論的枠組みで扱ってきたかということ、述べる。

2.2 研究の枠組みと先行研究のレビューについて

研究の理論モデルとして、音声の学習という面については、理解可能なインプットを、繰り返して声に出すことということが重要なので、Krashen のモニターモデル (Monitor Model) のインプット仮説 (The Input Hypothesis) や、Swain のアウトプット仮説 (The Output Hypothesis) に加えて、聴覚性プライミング効果に注目する。

2-2-1 運動学習理論

まず、王 (2022) でも述べているが、運動学習の側面から見ると、習得しようとする内容を、声を出して繰り返すことにより上達するという能力に着目し、Okanaoya (2015) で述べられている、鳴禽類、鯨類、そしてヒトに認められている動物学的理論を基本的な理論モデルとする。言語の上達には何度も繰り返すという「運動学習」が有効であり、学習者が聞いて覚える「感覚学習」を経て覚えた音を、練習する「運動学習」によって習得につなげることができるということである。また、自分の発声を確認しながら学習効果を上げる「聴覚フィードバック」も重要で、目指す音声に近似した音声を習得できるというミラーニューロンによって、音声の上達をはかることができるという能力である。言語学習についても、Krashen のインプット仮説や Swain のアウトプット仮説が、学習状況について同様の観察を理論として提唱している。

2-2-2 プライミング効果

さらに、このように繰り返して学習した音声、言語表現、語彙などについて、習得理論の側面からは、プライミング効果にも着目する。一般に、プライミング効果は、あらかじめ受けた刺激 (視覚・聴覚) が、その後の行動に無意識のうちに影響を与えるということを説明する理論であり、影響を受けた事柄がターゲット、それに先行する事柄がプライムと呼ばれている。言語

学習では、見たことがある、聞いたことがある語彙、表現がプライムとなり、その後、インプットされたものが無意識的に強く認識されることをプライミング効果とされている。

つまり何度も聴いたことがある語彙や表現が既習ではなくても、その後、耳に入って来た場合、プライミング効果として、他の語彙や表現より習得が促進されるということで、杉浦・堀（2020）でも検証されている。

2-2-3 先行研究

言語教育におけるナレーションやボイスサンプルを言語学習に活用することについての研究論文は、王（2018, 2020, 2021）があるが、他の研究は管見の限り見当たらない。本稿で取り上げた研究については、例えば、繰り返しインプットした音声が発音や語彙の習得に貢献しているということを述べたものとして杉浦・堀（2012）が聴覚プライミング効果の有効性を実証した研究としてあげられ、リズムの復唱がL2プロソディの発音向上にいかに関与するかということと、日本人英語学習者の習得に、プライミング効果が有効であるということを書いてある。

さらに、本稿で着目するランゲージアーツ（Language Arts）という側面から見ると、中等教育段階における試行の報告が多くみられるが、大学教育においても、この側面が着目されている。伊佐地（2022）では、どのような専門教育においても必要な、批判的思考力（critical thinking）を育てる理論と教育法としてランゲージアーツが取り上げられ、ランゲージアーツという表現と、その邦訳である言語技術という語を使用して、その実践報告をしながら、学生個人々人への振り返り調査をおこなったものをまとめている。松本（2020）では、Farris, P. J. & Werderich, D.E. (2011) を引用し、アメリカでは言語教育（英語）において、言語の4技能に加えて「視覚的に情報をとらえる力（viewing）」と「視覚的に情報を表示する力」（visually representing）」を含む6項目を言語技術とみなし、国語能力の全体的な底上げを目指した様々な試みを行ってきたと報告している。4技能のそれぞれを、さらに訓練することにより、能力の底上げをするということが重要だと述べられており、大

変意義があると思われる。前掲論文では聞く力と発信する力に特化した音声的な側面ではなく、視覚的な力に力点を置いている。しかし、松本（2020）が、4技能の訓練がただ一つの言語の訓練だけではなく、第一言語から第二言語への転移可能な認知資源として活用できるはずだとし、Cummins（2001）の共有基底言語能力（Common underlying proficiency）を引用していることは興味深い。本研究でも、音声的側面からアプローチしているが、単に外国語の発音習得のためではなく、4技能、そして考え、発信する能力が活性化することの検証を目指しているからである。

3. 音声を介した学習と歴史的先行研究

次に、あらためて声を出すということに着目して、歴史的にみた学習に関わる「声」の状況はどうか、先行研究を探ってみた。声を出すことが少なくなったと言われることが多いが、とくに COVID-19 のため、対面して実施する授業や会議が少なくなった状況も影響していると言われている。声を出して学ぶという学習スタイルは、最近でこそ、脳が活性化するなどといわれているが、そもそも歴史的に見るとどうなのだろうか。現代では、文字を目で追って読むときは、音読よりも黙読が普通であろう。しかし、声を出さずに読む「黙読」の歴史は実は浅く、「昔は声を出して読んでいた」と言われるが、言語習得の分野ではそうした研究課題は多くはないので、文献学、文学の分野の論考を見ると、布山（2012）では、日本での音読の変化と黙読の発声について、前田（2001）や辻本（2012）を引用し、江戸時代までは音読が普通であり、黙読の発生は明治時代の早い時期だと述べられている。また、アルベルトマンゲル（1999）には、ヨーロッパにおいても歴史的には声に出して読む音読が普通であったが、分かち書きが普及して、声を出して読まなくても語と語の切れ目がわかるようになり、黙読が発生、定着したと述べている。ヨーロッパと日本の例を具体的に見て行きたい。

3-1 歴史に見る読書の習慣と音声について—ギリシャ語の例

伊藤（2005）では、古代ギリシャ文字の表記は分かち書きもなく、大文字・

小文字の使い分けなどがないもので記述していたので黙読で内容を取ることは困難で、文字表記の技術が向上して初めて、声を出さずとも内容を理解することが簡単になってきたと述べている。分かち書きをしていない場合は、声を出して自分でモニターすることによって文意を取っていたということであろう。大英図書館が公開している写本を見ると、図1のように大文字が分かち書きされずに綴られていることがわかる。

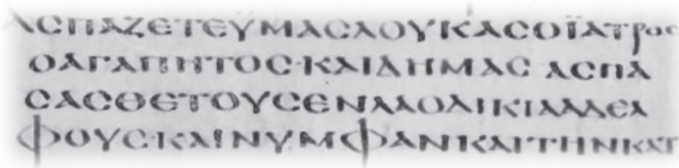


図1 ギリシャ語新約聖書シナイ写本の一部（大英図書館所蔵 公開資料）

伊藤（2005）はわかりやすいように、現代英語を用いて以下のように例示している。

FORGODSOLOVEDTHEWORLDTHATHEGAVEHIS
 SONEANDONLYSONTHATWHOEVERBELIEVESIN
 HIMSHALLNOTPERISHBUTHAVEETERNALLIFE

現代英語による新約聖書ヨハネによる福音書第3章16節の一節だが、大文字のみで分かち書きが無い上記の文も現代英語の表記は以下のようなる。

For God so loved the world that he gave his one and only Son, that whoever believes in him shall not perish but have eternal life.

言語の文字・表記が発達し、声を出さなくとも理解することが容易になった結果だということになる。

3-2 歴史に見る読書の習慣と音声について—日本語の例

日本の文字についても、上代の、ひらがなが使われる前の万葉仮名等は、漢字の意味を用いず、音読をしなければ意味は容易に取れない文字の使用法であり、音読が基本であると推測できる。その後、江戸時代にかけて文字・表記が発達し、漢字の読み方を調べることができる『節用集』が普及し、次第に読みに変化が表れていったと言えよう。さらに、明治時代に入って、福澤諭吉がその概念を紹介した「図書館」が、明治32年の図書館令とともに、「図書館」という用語と実際の施設が作られ、一般人にも公開され図書館が利用されるようになった。そこでは音読が控えられ、黙読が次第に広がっていったようである。

日本語では、最も古い文献は、上代の『古事記』『日本書紀』『萬葉集』で、それぞれ記録のための歴史書と歌集である。『萬葉集』は成立するまでの400年間に、貴族や学者だけでなく、民衆の歌も読み込まれ、一般人も関与する機会があったということがわかる。さらに平安時代になると真仮名（漢字）だけでなく、ひらがなも作られ、『源氏物語』等の文学も出現するが、これをどのように読んだかという、やはり声を出して読んだということが記録として残っている。

増田（1982）では、玉上琢弥の「物語音読論序説」などにも言及し、古代においては音読が普通であったと結論付けている。いずれにしても物語音読論の出発点でもある狭義の音読論について言うと、物語の基本的鑑賞法は、物語のテキストを女房に朗読させて姫君が絵を見ながらそれを聞くという形であるとも述べている。そうした、古代の音読について反論する研究もあるとはしながらも、物語を音読したのか、黙読したのかについては、音読と考えざるを得ない例はいくつも挙げられるのに対して、黙読の例はまだ示されていないという。さらに、古代の大学寮を中心とする学問教育は、漢籍の暗誦であったこともよく知られる事実だと記述し、暗誦は音読の習慣に寄らずしては不可能であるとも言及している。少なくとも中古（平安時代）とそれ以降、明治時代に入るころまでは声を出して読む、ということが主流であっ

たことがわかる。

3-3 声を出す学習への回帰

上記のように、声を出さずに文字から情報を読み取るようになって久しいが、急速な COVID-19 の状況もあり、ますます声を使わなくなってきている。歩くことが少なくなると長く歩くことが苦手になり、硬いものを嚙まなくなると顎が弱くなり、ウォーキングやよく噛んで食べることが奨励されているが、声も、出すことを心掛けないと、必要な時に出せなくなってしまう。

言語学習は、発声し、発音することで自分の声による内容を耳でモニターし、学習が促進される。また、学習者は文法や内容を受容して理解するだけでなく、発信しなくてはならない。声を出すということはその発信にも貢献する活動である。前述のランゲージアーツという言語学習のアプローチに、新しく、発信することを目指す方法として着目し、声を出すということに目を向けたいと考えている。

そこで、覚えること、考えることから、発信するということを目指す言語教育を底上げする活動として、ランゲージアーツの具体的方法として、ナレーションを活用し、ボイスサンプルを作成するという課題を設定し、授業に取り入れた。その授業について、以下に報告する。

4. ボイスサンプル作成の授業とその振り返り

授業はオンデマンド型によるオンライン授業で、音声録音の技術、ボイスサンプルの作成、それらの評価についてであり、14 回実施した。オンライン授業による実施となったのは、新型コロナウイルスの感染拡大防止による大学側の授業運営方針に則ったものである。なお、内容的にはオンラインでも対面でも運用は可能である。学生間の成果物の閲覧には、大学が管理する Google ドライブを使用した。授業の作業については、前作業、本作業、後作業というフェーズとして位置付けものを実施した。最後の後作業では振り返りをおこない、参加学生の自己評価などを本稿の最後にまとめた。

4.1 前作業—準備の活動

前作業は、学習者が自分自身の音声能力について「理解する」というフェーズと位置付け、授業では学生たちが以下の作業をおこなった。

- 言語と音声について知る
- 録音のためのソフトと機器を用意して使用する
- 録音の技術と加工について学ぶ

まず、自己紹介など、簡単な原稿を作成させ、それを各自の方法で練習したのち、録音し、自分の録音を聞き、客観的に確認することを体験させる。ここで二つのことを学習することができる。録音ソフトを扱えるようになるということと、自分の声を録音して、それを聞いて評価し、修正することができるようになるということである。録音ソフトには、無料でダウンロードでき、比較的簡単に使用できる Audacity を選択した。録音、編集、音響効果 (sound effect) のつけ方などを学習し、楽しんで録音素材を作成することができるようにした。このための学習教材として「Audacity の使い方」という動画を作成し、学習者に配布した。

4.2 本作業—練習と録音の活動

本作業は、前作業となる授業で習得した録音技術と、自分自身の声を録音して聞くという方法を活用し、原稿作成後、声に出す練習を繰り返し、それを録音する、「作成する」というフェーズと位置付けた。課題としたテーマは以下のとおりである。

- 自己紹介
- 日本語（母語）によるプロのボイスサンプル
- 外国語（英語）Biden Speech の録音
- 外国語（任意）自分で選んだ外国語のボイスサンプル

英語のスピーチについてはバイデン大統領が当選し、勝利宣言スピーチが流された時期であったため、Biden Speech の録画・録音や原稿が入手しやすい状況であった。また、英語に続きその他の外国語については、自分が上手に話してみたいと思う言語を選んで練習し、録音する課題とした。以上の二

つの課題を2か月にわたって実施し、学習者が提出した成果物を教員が点検し、それを大学の管理する Google ドライブにアップした。学生はそこから他の学生の成果物もダウンロードして聞くことができ、ピア評価もしつつ、自分の録音についても振り返りをおこなった。

4.3 後作業—振り返り

受講した学生は23名である。本稿では5名のデータを取り上げ、学生のそれぞれの記述について文章ごとに番号を振り、反省点、よいと評価できる点、他の学生との比較での気づき、今後への活用について述べている点などを以下のようにコーディングし、まとめた。(表1)

- ・ 自分の反省点
- ・ 自分の録音をよいと評価できる点
- ・ 他の人と比べて気づいた点
- ・ 今後、生かしていきたい点

表1 振り返りコーディング例

A	B
	自己紹介振り返り ①BGMの選曲、効果音で、話している内容にプラスの自己表現ができると思った。 ②いらぬ部分はカットし、話の盛り上がり、上がりで音量を調節する。 ③自己紹介という、自分を知ってもらおうことなので、ハキハキと大きな声で話し、声だけで表情がわかるような話し方にする。 ④人を引きつけるようなエピソードだと面白く、印象に残りやすい。 ⑤始めと終わりの挨拶をする。
	日本語ボイスサンプル振り返り ①約30回 ②プロの話し方はテレビやラジオなどでよく聞けるが、それに近づけるのは本当に難しい。 ③同じ文章を読んでいるのに、聞こえ方が全く違った ③次回は口をもっと動かしてハキハキと話し、本番を取る前に声出しをしてから録音したいと思う。
	Biden Speech 振り返り ①自分の読む音声20回くらい、動画は2回 ②息継ぎのタイミング、間の秒数、発音の強いアクセントを原稿に書き込んだ。 ③発音がつまらないように、何回も読み込んだ。 ④20回くらい 自分の録音を聞いた
	自由外国語ボイスサンプル ①英語 ②アマゾンのCM ③YouTube ④わかりやすい発音と内容だったから。時間も30秒でちょうどよかった。 ⑤To all our amazonの発音がつながっているところ。 ⑥Thankyou は簡単でよく使うが、丁寧にネイティブらしく発音すること。 ⑦簡単な単語が並んでいるので、間を取ることで言葉に重みを持たせるようにした。 ⑧ものを録音するかによって、喋り方が全く違うことに気がついた。 ⑨私はCMを選んだが、感謝を表す内容だったので真面目なトーンだった。 ⑩商品広告は真面目よりも明るく、注目するようなトーンになる。 ⑪どちらも普段の会話には使わない声の出し方をするので、とても面白い。

実際には色分けし、反省をグレー、自分に対するプラスの評価をピンク、他の人と比較した点をブルー、今後への希望を太字で表す、という表をExcelで作成したが、本稿では、文章にまとめて提示する。

振り返りの回数が進むにつれ、

- 自分の良い点を、多く記述できるようになっている。
- 具体的な点を記述できるようになってきている。
- 他の学生の録音を聞いて、そこからも学んでいる。

具体的には、よくできる学生は、次第に練習量も増えてきており、30回、あるいは50回以上聞いたという報告をしている。さらに、以下のような記述も、コーディングした詳細から抽出できている。

- ① プロの話速と同じになるように練習した。
- ② マイクに向かって声を出すことに慣れた。
- ③ 部屋鳴りがしないような場所を選べるようになった。
- ④ 英語の発音が、頭の中で考えていたのと違っていたので、練習した。
- ⑤ **Biden** 大統領の表情を、**YouTube** で確認して、練習した。
- ⑥ **Biden** 大統領の話速と同じようになるよう、練習した。
- ⑦ 何度も録音をして聞くと、そのたびに上達するのでやる気が出た。
- ⑧ 回を重ねるにつれて、練習の回数が増えた。
- ⑨ ポーズの秒数を計測し、原稿に書き込み、練習した。
- ⑩ 対面授業だったらこんなに声は出さなかったかもしれないが、オンラインだったので、はっきりと声を出して練習をした。

4-4 振り返りのまとめ

①のように、話速に注意を傾けて練習したという記述が複数見られた。これは、ボイスサンプルという音声素材を何度も聞くという練習だったので、集中したためだと思われる。ここで言及している話速は、早く話せるようになったということではなく、早すぎず、ゆっくりと適切なスピードで安定して発話することができるようになったという自己評価である。また、②、③は、

録音のテクニカルな面にも気が付き始めたということだといえよう。

④、⑤、⑥は英語に関するものであったが、普段、英語を聞く環境にない学生たちは、頭でイメージしていた発音とかなり違うということに、改めて気づいたようで、とくにリンキングや子音の発音を今までおろそかにしていたことに驚いているようであった。

⑦、⑧からわかることは、何度も自分の録音を聞きながら、それを客観的に評価しながら練習すると、上達することが実感でき、そうなると、もっと上手になるような気がして、練習の回数が増えていったということである。

また、⑨にあるように、発音だけでなく、無音の部分であるポーズにも注意を払い、強調などの表現も学んだと推測できる。さらに、対面授業の方が語学学習には向いていると言われているが、オンラインで学習することのプラスの面も評価していることがわかる。

5. まとめ

これまで研究、そして実践してきたナレーション、ボイスサンプルを活用した言語教育の素材は、発音指導のためだけではなく、4技能の学習を包括的に考えたものである。それに加えて、発信するということも加え、今後もさらに研究し、ウェブサイトや教科書作成といった教材も作成していきたい。それらの教材は音声発話の練習はもちろんのこと、聴解素材、あるいはディスカッションのトピックとして使用できる素材ともしたい。また、語彙については、既習語彙の確認だけでなく、新しい語彙を学習するという機会としても活用できよう。これには、今回加えた、ランゲージアーツという考えを取り入れ、改めて形作っていきたいと考えている。

また、ナレーション録音等の音響分析も続け、音声学的に発話・聴取双方の研究を進め、日本語教育の教材に貢献することを目標としたい。

さらに、今後も、この教材を活用しつつ、音声教育にも理解を持ってもらうことを目的として、教師研修ワークショップも開催していきたい。

参考文献

- 伊佐地恒久 (2022) 「言語技術の指導による批判的思考力の育成」『岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要』第 21 巻、47-54、岐阜聖徳学園大学
- 王伸子 (2015a) 「言語教育モデル CBI, CLIL の枠組みと大学における日本語教育—音声教育につなげるため—」『専修国文 100 号』1-13、専修大学
- (2015b) 「上級日本語学習者の文章読み上げにおけるポーズの実現について」『CAJLE2015, Proceedings 教師の役割・授業の再考—多様化する日本語学習者を背景に一』350-357、Canadian Association for Japanese Language Education
- (2018) 「新しい日本語音声指導法「ボイスサンプルプロジェクト」とその教師研修ワークショップ」*The 24th Princeton Japanese Pedagogy Forum 2018* 319-329. Department of East Asian Studies, Princeton University
- (2021) 「ナレーションとボイスサンプルを活用した日本語音声指導の効果」『専修大学外国語教育論集』第 49 号、99-112、専修大学
- 岡ノ谷一夫 (2010) 『さえずり言語起源論』岩波書店。
- 杉浦香織、堀智子 (2012) 「日本人英語学習者における聴覚性プライミング効果：単語副唱課題による検討」『関東甲信越英語教育学会誌』39-51、関東甲信越英語教育学会
- 玉村琢弥 (1950) 「物語音読論序説」『国語国文』第 19 巻 3 号、1-12、京都大学
- 増田繁夫 (1982) 「物語音読の行方」『日本文学』第 31 巻 5 号、34-42、日本文学協会
- 松本祐子 (2020) 「言語技術を日本語と英語で学習する試み」『宮崎公立大学人文学部紀要』第 27 巻 1 号、277-296、宮崎公立大学
- 義村徹 (2012) 「時代と呼吸するナレーター—の育成・採用・活かし方とは—」『ぎゅらく GALAC』37-41、放送批評懇談会
- Farris, P. J. & Werderich, D.E. (2011). *Language Arts: Process, product, and assessment for diverse classrooms*. Long Grove, IL: Waveland Press.

Okanoya(2015) Evolution of song complexity in Bengalese finches could mirror the emergence of human language. *Journal of Ornithology*. 156、 65-72

付記

・本研究は、JSPS 科学研究費補助金（科研費）20K00733 の助成を受けたものである。（「ナレーション音声による日本語教材の開発—効果の実証的研究と教材開発—」）